

皆さんこんにちは。  
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点でシリーズとして書き綴っています。

第16回は、「諸葛亮に足りなかったもの」について私見を述べたいと思います。志半ばで陣中に没することになり、悲しい最期となってしまふ点、ライバルの司馬懿や先の偉人と比較し何かが足りなかったと言わざるを得ないでしょう。

先の偉人の例として挙げたいのは、最高のコンサルタントとしてリスペクトしている張良（劉邦の軍師）です。劉邦の中国統一を助け、統一後は、劉邦と初めて出会った留の領地で細々と暮らし老衰で亡くなっています。後の権力者からの粛清を避けるために、家に籠り穀物を絶ち仙人になろうとカモフラージュしていた点など、老後の逸話に諸葛亮も感心したと思います。

諸葛亮は54歳で亡くなっており、死因は過労死です。蜀の末期は有能な人材が不足しており、その負担が諸葛亮に行ってしまったのは良くなかったのでしょうか。ビジネスに置換えて考えるなら、できる人はプレイヤーとして自分で全部やってしまいがちで、それは短期的にはいいと思います。しかし、長期的かつ全体最適の観点からは、人材は育たなくなるし、個人に知識経験が蓄積するだけで組織の財産にできず組織力を上げることはできないと思います。

歴代の皇帝が治世の模範とした「鼓腹撃壤」（私のコラムの6回目）の教訓、つまり誰がトップをやっても世の中を平和に治めることができるシステムのデザインについて、諸葛亮は足りなかったと私は思います。

具体的に言うと、南蛮征伐（これは創作との説があるが史実）なんかは、諸葛亮が行かなくても十分な成果が上げられたと思います。馬謖を筆頭に趙雲・魏延などを連れていけばそれで良かったのではと思います。つまり、最悪負けてもクリティカルな損害が出ないと見極めることができたなら、若手に任せてしまふ、失敗させちゃう、こうゆう他人に任せちゃう統治システムが魏にはあり、蜀にはなかったのではないのでしょうか。

諸葛亮を敬愛してやまず、漢中の定軍山ふもとの墓（「故事成語」ページの緑の塚）と、成都の武侯祠に行きました。小説で得たイメージと実際の地理的感覚や光景を照らしあわせるのが楽しみでした。

-バックナンバー中国故事成語をビジネスに応用する-

第1回目は「牛耳る」

第2回目は「鳴かず飛ばず」

第3回目は「司馬懿仲達」

第4回目は「我れ鳥獸にあらず」

第5回目は「国士無双」「狡兔死して走狗煮らる」

第6回目は「鼓腹撃壤」

第7回目は「外戚」

第8回目は「論語①」

第9回目は「東郭先生と狼」

第10回目は「孫子の兵法」

第11回目は「漢中（場所）」

第12回目は「不如意」

第13回目は「孟嘗君」

第14回目は「天道は是か非か」

第15回目は「道教①」